

光星2年ぶり夏勝利

延長激闘 スタンド歓喜

11日に行われた第100回全国高校野球選手権大会、アウェーゲームながらの延長10回の激闘を制し、2年ぶりの夏の勝利を果たした八学光星。西兵庫

生徒と教職員約700人や選手の保護者は、「よくやった」「次も頼むぞ」と惜しみない賛辞を送った。試合は序盤から光星が猛攻を仕掛けるも、明石商が点差を徐々に詰める展開に、2点差に迫られた五回、主砲の東健太郎選手がこの日2本目の本塁打で引き離すと、スタンドのボルテージは急上昇。東選手の父・昭夫さん(67)は「ここに来るために一生懸命練習していた。思い切りプレーしているように見える」と頬を緩めた。

(48)は「高校に進む時、必ず甲子園のマウンドに立つと約束していた。でも、ここまでできるとは正直思っていなかった」と明かしつつ、チームに貢献したわが子をたたえた。次戦に向け、「自分におごらずに頑張ってほしい」と期待を寄せた。(藤野武)

「マチニワ」で試合を観戦し、八学光星高の勝利を喜び市民ら11日午後2時5分ごろ、八戸市三日町



市民ら熱戦にくぎ付け

八戸市は11日、7月町側の歩道を歩く人やオープンした同市三日町の中を通過するために入った人も、試合が場「マチニワ」で、八学光星高の初戦のバブルックヒューイング(PV)を開いた。市民らは両手を挙げた。大勢の市民や帰省客らが、白熱した試合に「くぎ付け」となり、待望の1勝を喜んだ。市民らは、内壁に取り付けられた大型ビジョンの正面のほか、八戸三社大祭の山車やシンボルオブジェ「水の樹」の周辺、2階や階段の踊り場など思い思いの場所で観戦。三日町(福山拓司)



8回から登板した中村優惟選手(久慈・長内中出)が延長10回、自らのバットで勝ち越しの1点をもぎ取った瞬間、観客席は割れんばかりの大歓声に包まれた。試合が終わると、隣り合う人同士がハイタッチを交わす光景が至る所で見られた。中村選手の父・勝義さん

光星 留守部隊130人声援 「次も絶対勝って」



中村優惟選手が左前適時打を放ち、9-8と勝ち越すと会場のボルテージは最高潮に達した。11日午後1時55分ごろ、八戸学院光星高

約130人が校内のオープンスペースに設置された大型スクリーンで明石商戦を観戦。黄色いメガホンを打ち鳴らしながら、延長の末の初戦突破を喜んだ。初回、4番東健太郎選手が右越え本塁打で2点を先制すると、会場は「やった」「よっしゃー」と早速大盛り上がり。四回に2点差まで詰め寄られたが、五回に東選手がこの日2本目の本塁打を放つと再び大歓声に包まれた。

甲子園球場で初戦を観戦した応援隊は12日に八戸に戻る予定。同校によると、15日の龍谷大平安(京都)戦に向けて希望者を募り、新たな応援隊を編成するという。(須田山裕太)

八戸市湊高台6丁目の八戸学院光星高では11日、サッカー部や卓球部など「留守部隊」の生徒や教職員ら

延長10回の勝ち越し打に沸く八学光星高ナインの保護者ら

11日、甲子園球場